

平成28年 月 日

愛媛大学長 殿

プロジェクト代表者 氏名	教育学研究科 教科教育専攻 理科教育専修 小澤 優樹
指導教員氏名	所属 教育学部 理科教育 大橋 淳史

プロジェクト名：藍染め伝統文化の次代への継承

調査・研究の概要：

1. 問題意識

近年のグローバル化の推進により、人々は急速に変化する世界に目を向けるようになった。その一方でグローバルとは対極にある、ローカル、なかでも伝統文化への人々の興味関心は薄れ、衰退の一途をたどっている。そこで、私たち学生団体は、愛大GPの活動を通して藍染め産業が再び愛媛の伝統文化に位置づけられるよう3年間活動してきた。この活動により、藍染め産業の伝統文化は、愛媛の人々に認知されるようになった。しかしながら、藍染めを愛媛の伝統文化として継承していくには、地域との協働が不可欠である。そこで、学生と地域が藍染めの伝統文化の継承を行っていく協働的な社会モデルの基盤を構築することを課題とした。

2. 目的

伝統文化の次代への継承について学生と地域が一体となり、地域を活性化する方法の提案

- 1) 藍染め伝統文化の継承に参加する学生数の増加
- 2) 地域との協働

3. 方法

- 1) 藍染め活動の参加学生と不参加学生のアンケート比較調査
- 2) 藍染め体験活動を通じた体験者によるアンケート調査
- 3) アンケート調査による藍染め伝統文化の次代への継承の提案

研究成果：(800字～900字程度)

目的1) 藍染め伝統文化の継承に参加する学生数の増加

方法1)より参加学生に比べ不参加学生は、伝統文化の興味関心が低い傾向が示された。また、不参加学生は伝統文化を守るための活動も低い傾向を示している。これは、伝統文化の興味関心と伝統文化を守るための活動に相関性があることを示唆している。一方で、伝統文化を守る重要性の認識には、参加学生と不参加学生に有意差は認められなかった。以上より、不参加学生は、伝統文化に代表される地域性と自らの関連性への認識が弱い。この理由として伝統文化は不便で未発達なので、現代の価値観と相容れないという考えが根底にあるようだ。たとえば、藍の染料は、毎日藍の状態や周囲の環境を調整し、100日ほど発酵させて作る。こうした伝統文化の不便な側面に触れることで、未発達な文化を守る活動だと感じ、継承への意欲が低下しているようだ。そこで、現代社会に適した伝統文化の在り方として、科学技術と伝統文化の接続が重要である。学生の藍染め伝統文化継承の参加意欲向上のために、藍染めの際に手間や時間を省略することで、学生の参加をより促すことが期待される。したがって、「藍染め伝統文化の継承に参加する学生数の増加」では、「藍染めをする」ことを守り、簡易に短時間で行う活動を追求することを提案する。

目的2) 地域との協働

子どもたちの愛媛県の藍染め産業の伝統文化の認知率は50%未満であった。一方で、藍染め実践後の藍染めの興味関心は90%と高い値を示した。また、藍染めの活動を継続することや藍染めの情報を他者に伝達することも80%と高い値が示された。さらに、藍染め産業の伝統文化を調査したい園児・児童は60%以上であった。以上より、子どもが興味関心を抱くことは、「調査する」主体的な活動につながることを示唆された。したがって、「地域との協働」では、子どもが藍染め活動に興味関心を抱けるように、学生アシスタントが藍染め活動を定期的に行うことが重要である。また、子どもが興味関心を抱けば、他者に情報を発信することもアンケート結果より示された。そこで、「地域との協働」では、「学生の活動」→「子どもたちの興味関心」→「地域の人々の興味関心」の流れを構築することを提案する。

今後の課題：(400字程度)

本プロジェクトの実践より、伝統文化の次代への継承について学生と地域が一体となり、地域が活性化する方法を2つ提案した。この提案を実施していくことで、愛媛の藍染め産業の伝統文化の継承を行っていく協働的な社会モデルを構築することが期待される。しかしながら、提案や短期間の藍染め実施で終わってしまったら、伝統文化を次代に残していくことはできない。愛媛の伝統産業を次代に継承していくために今後は次のように進めていく。本プロジェクトで提案した藍染め継承案を用いて、5年そして10年またそれ以上の長期的な活動を実施していくことである。長期的な活動を通して、学生と地域が協働して藍染め産業に代表される愛媛の伝統文化を守り伝えることで、地域創生、地域活性化を行う。

指導教員からのコメント

学生は、企画運営から評価分析まで、自ら考え、行動して成果を上げた。地域からの評価は非常に高く、実施機関からは次年度以降の継続的な実施も依頼されている。学生自身が考え、地域と協働して取り組む活動は本学としても貴重な活動のひとつであり、教育学部の目玉事業のひとつとしても計上されている。今後のご支援も期待したい。